

平成21年 6月10日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520155
研究課題名（和文） 『後素集』の基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental studies of Kōsoshū

研究代表者

小助川 元太（KOSUKEGAWA GANTA）
呉工業高等専門学校・一般科目・准教授
研究者番号：30353311

研究成果の概要：本研究では、狩野一溪が元和九年（1623）に編述した『後素集』について、漢画の画題とその解説に注目し、それが中世末期から近世初期にかけての絵画の鑑賞者である知識層の故事理解をどの程度反映させているのかという問題を解明するべく、基礎的調査を行った。とくに、同時代の政治思想が反映される「聖賢」「帝王」の項目に注目し、明に成立した鑑戒書『帝鑑図説』を利用したと思われる部分を取り上げて考察を試みることで、編者一溪の故事理解が同時代の一般的な故事理解をある程度反映したものであったことを明らかにした。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	420,000	2,920,000

研究分野：文学

科研費の分科・細目：国文学

キーワード：画題・後素集・帝鑑図説

1. 研究開始当初の背景

近年、戦国から江戸初期にかけての国家統合の過程における支配イデオロギーの形成が、藤原惺窩や林羅山ら一部の突出した思想家によってのみ行われたのではなく、より広範な社会的・集団的な営為によって行われたことが論じられるようになった。

中でも漢籍故事を題材とした絵画が支配者の荘厳化に一役買っていたという問題が、近年の絵画史研究において注目されてきている。

具体的には、織田信長の安土城の障壁画に聖賢図が描かれていたことや、徳川将軍家が諸侯との対面を行った座敷の障壁画に『帝鑑

図説』を代表とする勸戒人物画を選んだことなどが、封建的な身分の秩序化を実現するための一助となったものとの指摘がある。

このように、その背景に物語を持つ絵は、しばしばそれを見る者たちの行動にも影響を与えていたといえる。

申請者は、絵師の手になる『後素集』が、このような同時代の漢画享受を背景に編まれたものであり、その画題解説が同時代における漢画鑑賞者の理解を示すものである可能性が高いことを踏まえ、文学というメディアと絵画というメディアとが邂逅する場として立ち現れた画題解説書『後素集』の分析を通して、政道観や忠孝といったイデオロギーの問題を含む漢籍故事のイメージが、いかなる形で戦国時代から江戸初期にかけての日本社会に形成され、定着していったのかという問題を解明したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本初の画題解説書『後素集』を分析することによって、文字メディアあるいはオーラルなメディアとしての文学の享受と、視覚メディアとしての図像によるイメージ形成という両方の観点から中世末期の漢籍故事受容の実態を解明することにある。そこで、本研究においては、以下の3項目を柱とする。

(1) 『後素集』 収載故事の典拠に関する研究

『後素集』の故事理解のレベルを確認するために、『錦繡段抄』『中華若木詩抄』などの抄物、『帝鑑図説』のような挿絵入りの舶来書籍や狩野派の絵師の手による絵画など、調査対象となる資料群を定め収集し、比較を行う。

(2) 『後素集』における画題分類の研究

百科事典としての側面から、その画題分類の同時代における位置づけを確認する

ために、『太平広記』や『事文類聚』などの中国の百科事典、『下学集』、『壺囊鈔』、『月庵醉醒記』など本邦の古辞書・百科事典類との比較を行う。

(3) 『後素集』 編述時の学問的環境の研究

『後素集』が編述された時期である、戦国末期から江戸初期に至る日記資料の精査をすることで、当時の知識人たちの人的交流や学問の傾向を探り、狩野派の絵師に影響を与えた学問的環境の実態を明らかにする。

3. 研究の方法

初年度は、前記の研究目的のもとに、基礎的調査を進めたが、時間的な制約や最終的な成果発表研究の都合から、2年目よりテーマをある程度絞り込んで調査を進める方向に切り替えた。具体的な研究方法と手順は以下のとおりである。

(1) 日記資料の調査

戦国時代から江戸初期にかけての日記資料を調査し、絵師や絵画に関する記録や、書籍の貸借の記事などを中心に、絵師と知識人たちとの人的交流や、共有していた可能性のある故事理解について、確認をした。

(2) 『帝鑑図説』の調査

政治思想に関わる項目の調査として、『後素集』の「聖賢」「帝王」の画題解説に利用されている『帝鑑図説』に注目し、その諸本調査を行った。また、『帝鑑図説』をもとにした実作例と『後素集』に採用され利用した『帝鑑図説』がどのテキストに近いかという問題などを明らかにした。

(3) 同時代の政治思想との関連の調査

一溪の画題解説が、同時代の諸資料の中で、どのような位置づけにあるのかを知るために、同時代の抄物や享受されていたと思われる軍記、注釈書などを対象として、

主に政治思想に関わる事項を中心に調査を進めた。

(4)研究成果の発表

最終年度に、2年間に渡る上記の基礎調査をまとめ、成果発表を行った。ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)の国際会議の研究発表に応募し、採用され、2008年9月にイタリアのレッチェで開催された国際会議で研究発表を行った。また、その発表結果をまとめ、帰国後、学術雑誌『国語国文』に投稿し、採用が決定した。(2009年6月掲載予定)また、本研究で調査対象となった『帝鑑図説』のテキストの中で、『後素集』と比較的近い時期に出版された和訳本『帝鑑図説』の翻刻を行った。

4. 研究成果

(1)『後素集』の『帝鑑図説』利用について

2008年9月20日から23日にかけて、イタリアのレッチェで開催されたヨーロッパ日本研究協会(EAJS)の国際会議で、「The Kōsoshū and its Commentaries」と題する発表を行った。これは、それまでの研究成果をまとめたもので、主に『後素集』の『帝鑑図説』を利用した部分に見られる独自表現が、同時代の抄物や軍記などに引用される漢籍故事と一致するという点を踏まえながら、当時の公武の知識人の持つ学問的素養が絵画の制作者たる絵師やその仕事に反映されている可能性を論じたものである。会場の反応が良かったため、帰国後、論文の形にまとめ、『国語国文』(京都大学国語学国文学研究室)に投稿したところ、掲載が決定した。(2009年6月掲載予定)

(2)画題解説部分の位相の問題

基礎的調査として、『後素集』の画題解説部分を見直す作業をしている中で、画題解説部分に①図像のコード化を目的とし

たもの、②絵画の背景となる故事の解説を目的としたものという二種類の位相があり、さらにそれらを組み合わせて分類すると、約7種類のパターンがあることが分かった。このことについては、次年度に新たな研究課題「中世後期成立の百科全書的テキストに関する基礎的研究」が基盤研究(C)で採用されたため、引き続き調査を続けてまとめていきたい。

(3)和訳本『帝鑑図説』の問題

『後素集』に『帝鑑図説』が利用されていることから、『帝鑑図説』の日本における受容の問題を考えるために、『後素集』成立から間もない時期に出版された和訳本『帝鑑図説』を所属する高専の紀要に翻刻紹介した。その作業過程で、和訳本『帝鑑図説』の挿絵が秀頼本『帝鑑図説』とほぼ同じであること、和訳を行ったのは、それなりに漢籍に造詣の深い人物であることが分かってきた。今後も調査を進めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①小助川元太、「『後素集』の『帝鑑図説』利用」、国語国文、78巻-6号(予定)、2009年、査読有

②小助川元太、「〈翻刻〉奈良県立図書館蔵『帝鑑図説』(寛永四年刊本)巻一～巻四」、呉工業高等専門学校研究報告、第70号、64p～90p、2008年、査読無

[学会発表] (計1件)

①Ganta Kosukegawa, The Kōsoshū and its Commentaries, 12th International Conference of the European Association for Japanese Studies, 2008 22 September, Lecce Italy

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小助川 元太 (KOSUKEGAWA GANTA)
呉工業高等専門学校・一般科目・准教授

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし